

## Noguchi Summer Medical School に参加して

医学科 6年 佐藤 諭

長かった実習が終わり本格的に国試対策を始めた7月に千葉の亀田総合病院で行われたNoguchi Summer Medical School というセミナーに参加してきました。本セミナーでは米国の医学教育で日常的に行われている「患者の訴える症状や身体所見から病態生理を推理し、そのうえで病態を証明するための臨床検査の必然性を説明でき、そのうえで正しい診断・治療に導いていく」というアプローチを実際の臨床例から少人数のグループで学びあうということを中心に行いました。それは私達が3年生でおこなったチュートリアルに近いものです。セミナー参加者は北は北海道大学、南は熊本大学と多くの大学から総勢34人の学生と実際の医療現場で働いている15人の医療従事者が参加していました。「将来は海外に留学して移植を学びたい」、「日本だけでなく国際的な活動がしたい」といった世界へ羽ばたきたいという人や「今の日本の医学教育をもっとよくするために自分もなにか力になりたい」といった教育に関心のある人など様々な夢をもった人達が参加しており、お世辞にも交通の便がよいとはいえない千葉の房総半島に全国各地から多くの人が集まったということからもそのモチベーションの高さが伺えました。セッションは全部で6回あり、各セッションは1人の講師に学生6人、オブザーバーの先生数人が1グループになり講師が架空の患者の説明をしながら他の参加者がディスカッションしていくというものでした。面白かったのは6回のセッションでもどれも一工夫されていて、講師が米国人で全て英語でおこなわれたものや小児科のセッションでは人形を用いて救命の実技も交えるなど何度やっても飽きることがなく、しかもどの参加者も非常に積極的に参加しておりお互いに刺激し合いながら学べました。このような学習法は特別な能力も装置も必要とせず正直やろうと思えばいつでもどこでもでき、実際米国の多くの医学生は日常的に行っていることです。そしてこの学習法を成功させる唯一のポイントは【ディスカッションに積極的に参加する】という高い学習意欲だと思います。日本の多くの大学医学部ではこのような学習法を積極的に取り入れていますけどどの大学の学生も今回のセミナーと比べ積極的なディスカッションがチューター、学生ともほとんど行われていない状況ということでした。かといって日本の学生は知識や技術は決して悪いわけではなく講義主体の学習や知識偏重の医師国家試験、そして教育者が十分に評価されないシステムなど様々な要因が考えられます。そして今の医学教育をより実りのあるものにしていくために私達医学生がもっと問題意識を持ち積極的に医学教育に関わっていくことが大切だと思います。

東医体など部活以外で他大学の学生と交流する機会がほとんどなかった私にとって全国様々な大学生と交流できたこと自体が大きな財産になりましたし今回のセミナーの存在を教えていただいたばかりではなく強力にサポートしてくれた袴田先生には大変感謝しています。

最後に本セミナー開催してくれた野口医学研究所理事長である町淳二先生が私達に送ってくれた言葉を記したいと思います。

**Enjoy learning, Enjoy teaching, and Enjoy caring your patients !!!**

